

行政インターンシップレポート：

公務員として働くということ

法学部法律学科 4年 原 沙織

行政インターンシップ受講のいきさつ

大学時代は貴重な時間だ。社会人未満の学生ならではの視点で物事を見て疑問を持つことが出来る。こんな期間だからこそ、興味のあることには何でも挑戦しようと思った。

そこで出会ったのがこの「アカデミックインターンシップ」だ。私は行政インターンシップを受講した。これは普通のインターンシップとは異なり、夏休みに自分の希望する自治体で二週間の実習をすると単位がもらえる大学の授業である。もちろんただインターンシップに行くだけではなく、前期の授業での事例問題に基づくグループディスカッションや後期の報告会を通して、自治体行政について理解を深めることが出来る。また担当教員には、大学の教授のみならず、実務経験豊富な自治体職員の方々がいらっしゃることも魅力的だ。教科書には書いていないような現場の実情をうかがうことが出来、社会人として働くことの厳しさを思い知る一方で、そういったリアルな話は非常に興味深い。

この授業を受講しようと思った理由はもちろん、私が公務員志望だからである。しかし、この目標に全く疑問がないわけではない。公務員に求められる資質は何であろうか。そもそも公務員には何が出来るのだろうか。それは民間の会社には出来ないことなのだろうか。これらの疑問に自分なりの答えを得るためにも、実際に「生の現場」を見てみたいと思った。

以上の理由で受講を決めたが、いざ実習先を決めるに当たってだいぶ悩んだ。都市計画、地域振興、観光産業、福祉、教育……と興味のある分野がなかなか絞れなかったからだ。結局、どこの地域でも課題である福祉について主に学びたいと思い、全国から視察が訪れるほど福祉分野において有名な町田市を希望実習先として選んだ。

町田市では毎年二週間の受け入れ期間のうち、初めの数日を福祉施設での実習に充て、残りの日は学生各々が希望する部署で受け入れている。ここでは、主に福祉施設での実習内容について述べてみたい。

インターンシップ前半・福祉施設「ひかり療育園」にて

私がインターンシップの前半にお世話になったのは、福祉施設の「ひかり療育園」である。この施設は公設公営の障害者福祉センターであり、身体障害者や知的障害者を対象としている。デイサービス事業のみならず、もろもろの理由で通えない利用者のための訪問部があるところが特徴的だ。

ひかり療育園での実習内容は、利用者の作業補助や職員からのレクチャー、車いす体験など多岐にわたっており、非常に密度の濃い三日半だった。

人と人の触れ合いの場である福祉施設

皆さんは、なぜ福祉施設が必要か考えたことがあるだろうか。私は今まで福祉施設の必要性を頭では分かっているつもりでも、実感がわかなかった。そんな私に衝撃を与えたのが施設職員からのレクチャーだった。

今では養護学級をどこでも見掛けるが、それがなかったころは、障害を持つ児童は就学猶予を与えられるか、場合によっては就学免除をされていたという。つまり、学校に通えなかったというのだ。私たちが現在こうやって社会に出て多くの人と付き合っているのは、学校に行くことで知識を得、人と出会う機会を得たからであろう。しかしその機会を逃してしまったらどうなってしまっただろう。社会とつながるきっかけを失ってしまうのではないだろうか。そして障害を持っているからといってその機会を奪われるいわれはないのだ。

施設の利用者が職員やほかの利用者と楽しそうに話しているのを見て、こういった施設があるからこそ、より多くの障害を持つ方々が他者と触れ合う機会を得ることが出来るのだと思った。

また、地域との交流事業としては、センター祭りの開催やまちだミュージックフェスティバルへの参加などを行っている。今回の実習期間中にセンター祭りが行われたが、利用者の皆さんは出し物の練習や展示物の作成に連日いそしんでいた。地域との交流や自己実現、達成感を味わうことといった、私たちが普段何とはなしに享受しているこれらの機会も、すべて社会の中で生きることによって周りから与えられた機会である。障害を持っている方も等しくこのような機会を得られることに、福祉施設の意義があるのだろう。

当事者の立場で「気付く」ということ

実習では、ダイサービスの補助だけではなく、実際に自分が障害を持つ体験もした。自分で歩けない、食事が出来ない、目が見えない……。こういった障害は先天的なものとは限らず、むしろ事故や病気をきっかけとした後天的なものが多いだろう。指導担当の方は、視力が低下することも障害の一種だとおっしゃっていた。すると今まで他人事だった「障害」が急に現実味を帯びてくる。障害があるから特別なのではない。障害を持っていても今まで通りの日常生活を送るには何が必要だろうか。私たちが当事者として受け止めることで、彼らが求めるものに「気付く」ことが出来、福祉はもっと身近なものになるだろう。

近年の法改正によって、今まで行政によって与えられていた福祉サービスを利用者が自分で選べる制度になった。利用者に選ばれるようなサービスを提供するためには、利用者が何を求めているのかを知らなくてはならない。そこで利用者のニーズを把握することが行政にとっても重要となってくる。ニーズの把握には統計を取って分析する方法があるが、中に利用者の意思や自立志向の要望などといった、数字からでは読み取れないものもある

う。これらを理解するためには、利用者の視点に立つことが必要となる。

今回の実習でも、作業補助をしている時に利用者の求めていることが分からず迷惑を掛けてしまったことなど、「気付く」ことの大切さを実感する場面が多々あった。対人関係だから完全に理解するのは難しいし、相手の意思を酌み取るためには相当な経験も必要だろう。しかし相手の求めにこたえることは、行政に限らず対人サービスの基本ではないか。

これは現場での直接のサービス提供に限られない。福祉施設での実習の最終日に、個別支援計画の書類作成体験をさせていただいた。これは施設の利用を始める前に、利用者の家族と話し合うことで支援の方針を決めて書くもので、より利用者のニーズに合ったサービスを提供するために欠かせないものである。体験では実際に相談員役と利用者役に分かれて会話をし、会話の中から必要な事項を読み取っていった。ここで相手が何を求めているか酌み取れるか否かによって、提供出来るサービスの質は大きく変わるだろう。

利用者が求めているものに「気付く」ためには、彼らの視点に立つことが重要なのだ。

行政が出来ること

「ひかりは民間の福祉施設とは違って市民はすべて受け入れるから、南北に長い町田市の中から端まで送迎するのにすごく時間が掛かっちゃうんだよ」。これは施設職員がふとこぼしていた言葉だ。

公設公営のひかり療育園の職員は皆公務員である。ひかり療育園でのみ勤務する職員も多いが、一般事務職として採用され、異動してきた職員もいる。

先ほどの言葉には、行政と民間の違いがよく表れていると思う。確かに民間企業も行政と同じようなサービスを提供することは可能だろうし、住民のためになる仕事も出来るだろう。実際、行政の仕事の一部を民間に委託することもある。しかし、あくまで利潤追求が目的であると、採算が取れない場合にはサービスの対象とならない場合がある。例えば、あまりにも施設から離れ過ぎていて送迎に時間が掛かってしまうような地域に住む利用者は、受け入れを渋られてしまうかも知れない。その点、公営施設ならば住民すべてがサービスの対象であるため、そのような心配はないだろう。

もちろん民間部門にも長所は多くある。競争することで互いに質を高め合えるし、低コストでのサービス提供も実現出来る。これは行政部門も大いに見習わなくてはならないと思う。しかし、それは一般大衆に求められていることが前提なのではないか。たくさん売れなければ採算が取れないため、民間企業が行き着く先はどうしても「大衆受け」になってしまうのだと思う。それを批判するつもりは毛頭ない。ただ、その一般大衆の枠からはみ出てしまった人たちのためにだれかがサービスを提供する必要があるのではないだろうか。

町田市には多くの福祉施設があるが、ひかり療育園は唯一公設公営の施設である。ひかりはほかの施設に通えなくなり、行き場をなくした方を対象とした施設なのだそう。例えば家族の送迎が出来なくなってしまったり、昼夜逆転の生活になってしまったために

通所が出来なくなってしまったり、作業所での他者との競争に耐えられなくなってしまったりするケースが挙げられる。こういったニーズにこたえるのがひかり療育園の役割なのだ。

以前は乱立していた民間の福祉施設も、制度の変化に伴い補助金の支給がなくなったため、最近では統廃合が激しいという。こういった状況に左右されずに安定したサービスを提供出来るのは、公営ならではだろう。近年、行政が事業を民間委託するケースが少なくないが、最後のとりでは行政が確保すべきだと思う。

インターンシップ後半・教育委員会にて

学ぶことが多かった福祉施設での体験はあつと言う間に終わり、その後の日程は各々の志望した部署での研修となった。私が志望したのは教育委員会の学校教育部指導課管理係だ。以前小学校で授業補助ボランティアを経験したことがあり、いくら計画が完ぺきだとしてもそれを実行する現場は多くの課題を抱えていることを学んだ。また、塾講師のアルバイトで公教育とは違った視点から教育に携わったこともあった。そこで今度は行政の立場から教育にどうかかわることが出来るのか学びたいと思い、志望した。

お世話になった指導課管理係は、補助金の交付、通知の発送、児童生徒対象の事業に関することといった事務をこなす部署である。そこで私が任されたのは、決裁済みの書類の仕分け、交換便を届けることとその整理、各種書類の発送準備、データの入力・チェックなどだ。今回与えていただいた、職員に交じってのデスクワークという「公務員の日常」を経験する機会は、学生の私にとっては職場の雰囲気を知る上で非常に貴重なものだった。

行政の立場からの教育への関与

今回のインターンシップで主に携わった業務は、中学生の職場体験だった。これはニート対策や地域社会との結び付きの強化を目的として町田市が数年前から実施している事業である。中学二年生が市内外の事業所で一週間働き、事前学習や事後の反省を通じて働くことに対する理解を深める。また、実施後には生徒・保護者・各学校・受け入れ先にアンケートを取り、考察・分析によって課題を発見し、次年度に生かす。この事業に対する指導課管理係の仕事は、受け入れ先の依頼、事前や事後のアンケートの依頼とその集計などである。

今回私に任されたのは、事前アンケートの依頼業務だった。単純作業とはいえども、さすがに市内外の八〇〇以上の事業所へ書類を発送するのは容易ではない。更に、私が携わることにはなかったが、受け入れ依頼は三〇〇〇近い事業所に行くそうだった。

インターンシップは短期間であったし、夏休み期間中であったために、私がすべての業務を見たわけではないため一概には言えないが、行政の立場からの教育への関与は主に補助・支援にとどまり、教育現場に積極的に働き掛けることはないように感じた。

これは事業の計画段階でも同様であろう。例えば教育委員会の審議を経た抽象的な方針

を具体的な政策にする場合、中心となるのは指導主事の先生方であり、自治体職員は予算や制度に沿った意見しか言えないそうだ。しかし、この発言権の違いは教育者と自治体職員の役割の違いによるもので、当然のことであろう。

以上のように、行政の教育に対する役割とは制度面でのサポートなのだろうと感じた。教育現場が求めている政策を実現させるためにも、各学校との関係を密にし、互いに情報を共有することが求められていると思う。

終わりに

今まで「公」の仕事というと、デスクワークを行う自治体職員の役割のようなイメージがあった。しかし、二つの部署でのインターンシップを経験したことにより、行政サービスが多岐にわたり、多くの現場の方々と連携を取ることで成り立つことを実感した。

今回のインターンシップで実際に見ることはなかったが、近年では行政サービスの一部をNPO団体や民間企業が担うことも多いという。それでもなくすことの出来ない行政の役割とは、現場の業務が円滑になるように制度面から裏方として支える一方で、ほかではカバー出来ない部分や行政独自の仕事については積極的に介入することではないだろうか。

そして、今回のインターンシップでの最大の収穫は、公務員に求められる資質について考える機会を得たことである。私が思うに、それは相手の目線に立って考えられる能力ではないだろうか。特に自治体職員は利用者である住民にかかわる機会が多い。法律にのっとり仕事をこなすだけでなく、自ら問題意識を持ち、住民が何を必要としているのかを理解出来ることが重要であろう。

福祉センターも教育委員会も、頭で分かっていることと実際に見たものでは大きな差があった。今回のインターンシップで「生の現場」を見たことは、今後進路を選択し、社会に出て働く上で確実に役立つと思う。

関係部署の皆様、お忙しい中貴重な機会を与えてくださりありがとうございました。